

演題4. 根管内貼薬に用いる水酸化カルシウム含有
ガッターチャポイントの諸性質

○柳谷 隆仁, 中島 薫, 寺田林太郎
久保田 稔

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

【緒言】水酸化カルシウムは根管内貼薬剤としても使用されるが、貼薬と除去の煩雑さが欠点とされている。最近、これらの点を改良し根管内への挿入および除去が容易な水酸化カルシウム含有ガッターチャポイント (Calcium Hydroxide Points TM: Roeko 社製) が市販された。しかし、このポイントに関する報告は見当たらず、詳細は不明である。そこで、本研究では、ポイントの定量分析、ポイントを浸漬した生理的食塩水の pH 値の変化、X線不透過性、および形態について検討した。

【方法および結果】定量分析: EPMA (日本電子社製, JXA-8800) によりポイントの定量分析を行った。結果, Ca が約40wt%検出された。pH 値の変化: 透明根管模型に10 μ lの生理的食塩水をいれ55号のポイントを挿入し5分静置した。ポイント除去後, pH 指示薬 (フェノールフタレイン溶液, チモールブルー溶液, インジゴカルミン溶液) を加え pH 値を測定した。結果, pH 値は10.0~11.6の範囲にあった。X線透過性: MD用アルミニウム階段と不透過性比較を行った。結果, 80号は2mmのアルミニウムと同程度の不透過性であった。形態: マスターポイントのISO規格6877に従いd1, d2, d3の径を万能投影機 (Nikon 社製 V-12) で測定した。結果, 形態は規格を満たしていた。

【考察ならびに結論】定量分析により約40%カルシウムが認められ、浸漬溶液の pH 値は10.0~11.6の範囲にあり、水酸化カルシウムを含有している可能性が示唆された。X線不透過性は一般のガッターチャポイントに比べ低く、根管内でのポイントの確認は困難であると思われた。形態は、従来報告されているガッターチャポイントとほぼ同じであり、拡大号数より一段階小さいポイントを用いれば、容易に管内へ挿入できると思われた。

演題5. 探針触診圧検出装置の試作とその応用

○稲葉 大輔, 奥田・赤羽 和久*, 北田 泰之*
米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座
同口腔生理学講座*

現在、齶蝕と歯周疾患の検出には探針による触診が多用されている。その診断精度は触診圧に依存するが、それは常に手指感覚で決定されるため、診断は主観に影響されやすい。また、不適切な触診圧は診断エラーにつながるほか、過大な場合は歯質、とくに表層下脱灰病巣や上皮付着を損傷する危険もあり、適切な調整が重要となる。そこで、臨床的な診査状態で触診圧をモニターできるよう探針にセンサー (歪ゲージ) を備えた触診圧検出装置 (Probing Force Detector; PFD) を試作した。本装置は歯種・部位別に触診圧のモニターが可能で、臨床的な触診圧レンジ (0~400g) において荷重 (g) と出力 (V) は高い直線回帰性を示した ($r=0.999$)。本装置の実用性は高く、(1) 最適触診圧のトレーニング、(2) 触診圧キャリブレーション、(3) 診断の客観化、(4) 方針決定の規格化、などに有用と考えられた。なお、数名の診査者でテストを行った結果、齶蝕の触診圧は診査者間でおよそ100~300gの範囲で差があり、齶蝕の診断基準は個別に大きく異なることが示唆された。

演題6. 最近5年間に当科を受診した顎機能異常者の
調査

○鈴木 卓哉, 及川 桂子, 仲屋 文樹
浅野 明子, 藤澤 政紀, 石橋 寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

顎機能異常者の臨床像を把握するために、1994年1月から1998年12月までの5年間に岩手医科大学歯学部附属病院第二補綴科を受診し、顎機能異常と診断された男性103名、女性293名、合計396名を対象として、性別、年齢、来科経路、主訴、初発症状、誘発因子、随伴症状について調査した。

患者数は年間60~90人台と経年的に増加傾向を示していた。マスメディアを通じて顎機能異常が広く社会に認識されるようになったことが、原因の1つと考えられる。また、来科経路は直接来院した患者および院